

平成 24 年度 大学生の力を活用した集落復興支援事業 報告書

「古殿町大久田地区の
持続可能な地域活性化策の模索」

東北大学地域密着 Lab

2013 年 3 月 19 日

目次

1. はじめに	1
2. 古殿町と大久田地区の概要	3
3. 大久田地区の魅力と課題	8
4. 活性化策の提言	16
5. おわりに	21

1. はじめに

地域活性化に関する議論や実践は数多くの成功例が報告されている。その多くでは、近年盛んとなったグリーンツーリズムやアグロツーリズムを通じた農業と観光の融合によって地域の魅力をPRすることに成功し、地域外との交流人口の拡大を達成している。

一方で、結城(2009)が「地域の明日をつくるのはそこに生き暮らす人びとである」と指摘するように、地域住民の生活をベースにした負担の小さい地域づくりの方向性が求められている。新しいことにチャレンジすることチャンスを掴むために重要であるが、それによって活動の担い手が疲弊してしまえば元も子もない。結局、無理した活動は続かず失敗してしまうことになりかねない。地域に無いものを嘆き無理して作り出すより、現在行っている活動や元々地区内でのみ知られている魅力を引き出すことが、地域内外の交流を活発化させる手段のひとつとなりえるだろう。

そのためにも、現在の地域の足元の「あるもの探し」が大事である。そこで今年度の我々の活動の主軸は、「大久田地区の魅力と課題を再認識する」ことにした。我々は地域外の人間であり活動期間も限られたことから、活動の成果が、大久田地区に暮らす住民の方々にとってみれば至極あたりまえの論点しかでない危険もはらむ。だが、地区の方々にとってはもう一度自分たちの地区を見直すきっかけとなり、ひいては地域の活性化のための活動の一助となる可能性もある。加えて、地域外からの視点が魅力と課題を再認識する問題発見において非常に大きな力となることを指摘したい。地域に縁を持たない地域外からの視点を持つということは、地域の詳細を知らないという弱みだけでなく、地域内に住む人にとってみればあたりまえの出来事が魅力として捉えられる可能性も秘めている。

表 1 活動スケジュールと訪問メンバーリスト

活動日程	第 1 回 平成 24 年 9 月 29 日 ~ 30 日	第 2 回 平成 24 年 10 月 27 日 ~ 28 日
	29 日午前 移動	27 日午前 移動
	29 日午後 町役場への挨拶 移動観察(資料収集)	27 日午後 資料収集(直売所) 27 日午後 郷土料理の魅力再発見
	29 日夜 意見交換・交流会	27 日夜 意見交換・交流会
	30 日午前 移動観察(資料収集)	28 日午前 報告会
	30 日午後 世帯へのヒアリング調査	28 日午後 移動
	30 日午後 移動	

2. 古殿町と大久田地区の概要

はじめに、我々が今年度活動した「大久田地区(おおぐたちく)」の概要を記載する。大久田地区は、福島県石川郡古殿町の一部を構成し、字越代、字下大久田、字高房、字松久保の行政単位からなる。古殿町は1955年に宮本村と竹貫村が合併してできた町で、県南東部に位置し、平田村(北側)、いわき市(東側)、鮫川村(南側)、石川町(西側)と接する(図1)。古殿町の面積163 km²に対して大久田地区は41.5 km²と、町の約25%を占める。古殿町の行政地区割りは10地区に分かれていることから大久田地区の大きさが際立つ。

町内には東西に走る県道14号いわき石川線と国道349号線が幹線道路として走っており、いわき市や石川町、鮫川村へのアクセスが良好である。また、大久田地区にはいわき石川線と交差する県道135号三株下市萱小川線がいわき市境まで走っている。2010年交通センサスによると、昼間12時間自動車類交通量はいわき石川線で3655台、国道349号線で1985台、三株下市萱小川線で222台である¹。幹線道路2路線に比べ、大久田地区内を走る三株下市萱小川線の交通量は桁違いに少なく、自動車道路網の発達による便益を十分に享受できていない可能性がある。さらに、地価変動の傾向を整理しておく(図2)。地価の変動は用途の種別や市場の需要を反映しているため、交通量以上に評価が厳しい。2008年から2012年までの地価の変動を確認すると、大久田地区の地価の前年比は松川や竹貫の地区よりも下落傾向が強く、-10%近い。



図1 古殿町(青枠)と大久田地区(赤枠)の位置図

¹ いわき石川線の観測点は石川郡古殿町松川字前木63-1、国道349号線の観測点は石川郡古殿町山上字五輪平70、三株下市萱小川線の観測点は石川郡古殿町大久田字有実7である。

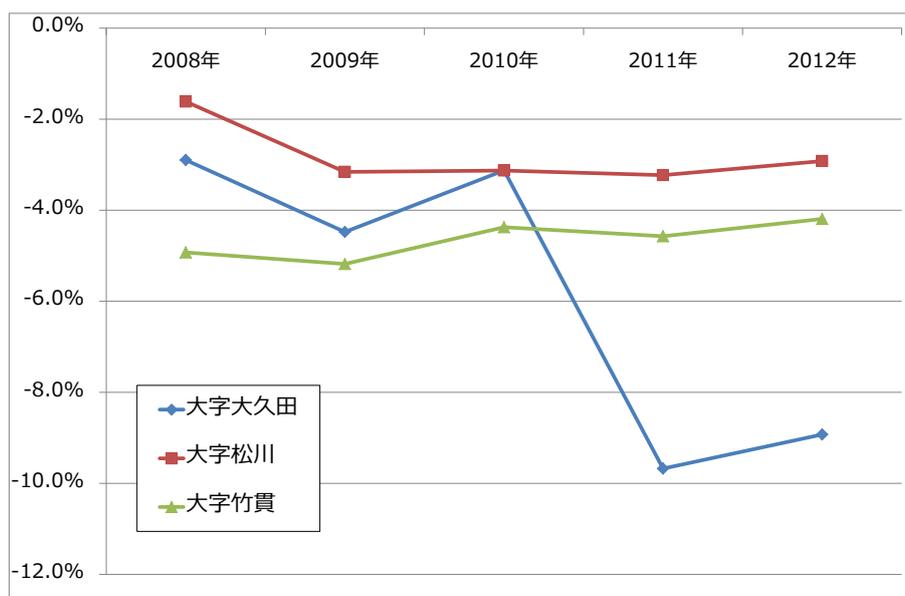


図 2 古殿町の地価変動(対前年比)

注： 大字大久田の観測点は大字大久田字ヲテマ 54 番 8 で用途は林地である。
 大字松川の観測点は大字松川字寺作 25 番 1 で用途は住宅地である。
 大字竹貫の観測点は大字竹貫字竹貫 54 番で用途は商業地である。

出典：都道府県地価調査 2007~2012

古殿町には文化的側面として流鏝馬・笠懸の神事が長く行われている。古殿町も「流鏝馬の里 古殿町」と冠し、PR に力を入れている。町 Web サイトによると、『起源は不詳であるが、言い伝えでは、竹貫郷十三ヶ村の鎮守として崇敬せられている所に建久 5 年(1194 年)、源頼朝から竹貫の領主に社領地が下り、時の竹貫領主はこれを記念して、領内兵士達による笠懸と流鏝馬を盛んにして祭礼当日の神事としたと伝える』と記されておりおよそ 800 年に渡る伝統文化である²。

次に、地域の基盤産業である農林業について整理する。農業も林業も自由に場所を移動して行うことはできず、まさに場所に縛られた産業であり、地域が最も大事にしなければならない。さらにどちらの産業も自然を相手にしたものであるため、地区の環境保持、人間と自然との共存、にとって非常に重要な産業として位置づけられる³。古殿町の 1 農家あたりの経営耕地面積は 0.94ha で、県平均の 1.64ha に比べると小さい。林業に関しても同様に 1 経営体あたりの所有山林面積は 10.97ha で、県平均の 21.62ha の半分程度である。他方、耕作放棄地面積率は 30.2%と高く、これは県平均の 15.67%のおよそ倍にあたる。これらの特徴から古殿町の農林業が大規模しにくく、現在の農林業政策で行われている補助事業の便益を享受しにくいと言える。

また農家の年齢構成を確認すると、農業就業人口(自営農業に主として従事する世帯員数)の年齢は

² 古殿町 Web サイト『古殿八幡神社の歴史』(<http://www.town.furudono.fukushima.jp/node/527>)より一部修正(2013 年 3 月 15 日最終アクセス)。

³ なお、農林業に関する資料は、農林業センサス 2010 を用いたが、農業集落を最小単位としているため、大久田地区として特徴を捉えることが出来ない。古殿町では旧宮本村と旧竹貫村に分かれて統計資料が公開されているが、ここでは古殿町として集計を行った。

大きく高齢化している(図 3)。農業就業人口 721 人に対する高齢者 525 人の割合は 73%である。人口の高齢化に伴い農家の高齢化も深刻な状況にある。しかし、農業従事者数(自営農業に従事する世帯員数)の年齢構成は農業就業人口に比べると低く、高齢者の割合は 36%である。すなわち、若い世代は農業をメインとして生活をしていないが、他の仕事の合間に親の世代の農業を手伝っている。すなわち古殿町の農林業は、他地域に比べて経済性が相対的に低く、世代が高齢化している問題がある。

大久田地区の最大の特徴は山林である。国土交通省の国土数値情報を用いて大久田地区の土地利用を確認すると、地区の 88%にあたる 36.7 km²が林地である(図 4, 表 2)。残る 4.8 km²のうち、農用地とその他(住宅地や交用地など)がそれぞれ 2.4 km²(6%)である。すなわち、大久田地区は山に囲まれた自然豊かな地区であることが読み取れる。この傾向は古殿町においても同様で、林地の占める割合は 82%である。大久田地区ならびに古殿町は林業の盛んな土地柄だと言える。大久田地区と古殿町の大きな違いは、大久田地区の林地に占める国有林の割合の高さにある。古殿町の 37%に対して大久田地区は 57%と高く、国有林の整備や伐採などの事業は国の行政に左右されるため、大久田はその影響をより強く受けていると言える。

大久田地区の人口は、2010 年現在 529 人である。年齢構成を確認すると、14 歳未満の若年人口は 54 人、15 歳以上 64 歳未満の生産年齢人口は 309 人、65 歳以上の高齢者人口は 166 人である(図 5)。高齢化率は 31.4%であるが、これは古殿町の高齢化率が 31.1%、福島県全体の高齢化率が 25%であることを考えると、それほど高いとは言えない。高齢化の問題は大久田地区だけではなく福島県全体にある問題といえる。10 年前の 2000 年、大久田地区の人口は 677 人であった。その内訳は若年人口 95 人、生産年齢人口 380 人、高齢者人口 202 人で、高齢化率は 29.8%であった。大久田地区の高齢化率はこの 10 年間で 1.5%増加したが、高齢者人口そのものは 17.8%減少したのである。高齢化の問題では 75 歳以上の女性人口が増えていること、50 歳代のベビーブーム世代付近の人口が今後高齢者人口に含まれ、高齢化率が急激に上昇すること、が指摘できる。10 年後の高齢化を単純に予想すると、2020 年の高齢化率は 44%に達する可能性がある⁴。だが、それ以上に大きな問題と考えられるのは、人口減少である。地区の人口は 10 年間で 21.9%も減少し、若年人口に至っては 43.2%も減少した。このペースで人口減少が進むならば、2040 年に地区の人口は半減、2080 年には 100 人を切ってしまう。

すなわち、大久田地区に必要なのは高齢化以上に人口減少に歯止めをかけることである。その対策は、早ければ早いほど人口減少の負担が小さくなる。そのためにも地域に眠る魅力や地域の底力を一旦整理し、アイデアを行動に移すことが肝要となる。そこで次章では大久田地区の魅力、課題を探った結果を報告する。

⁴ 推計では、人口の減少度合いを考慮に入れていないため、過激な予想である。

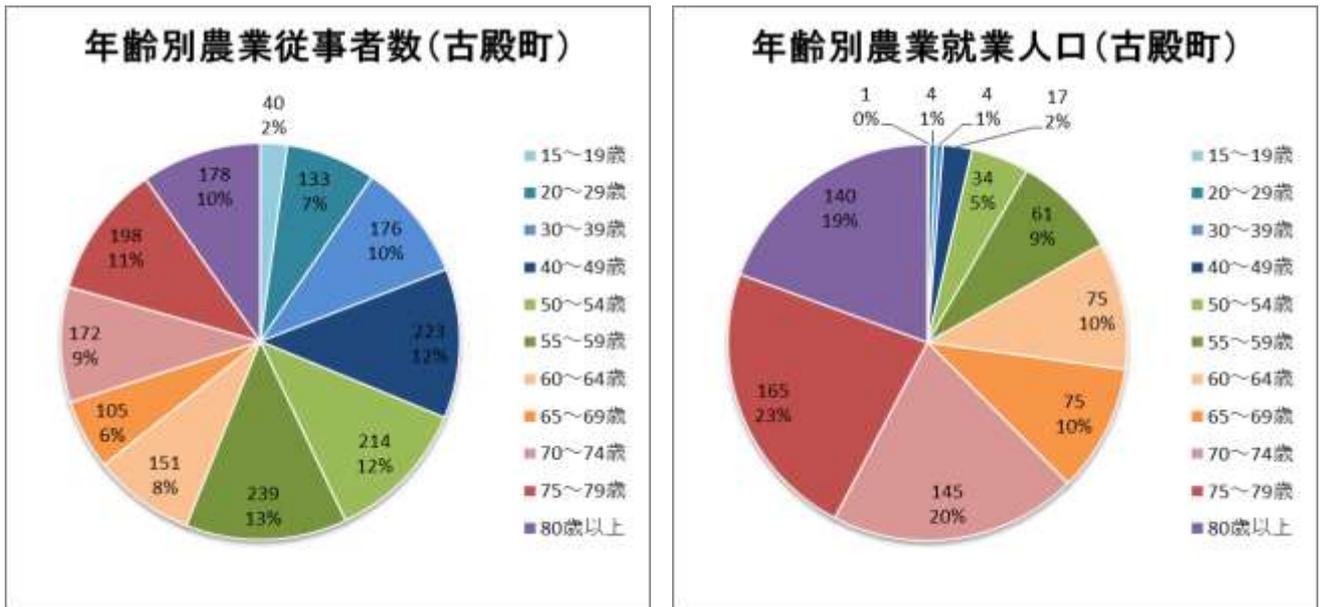


図 3 古殿町の農業担い手の年齢構成(2010年)

出典：農林業センサス 2010

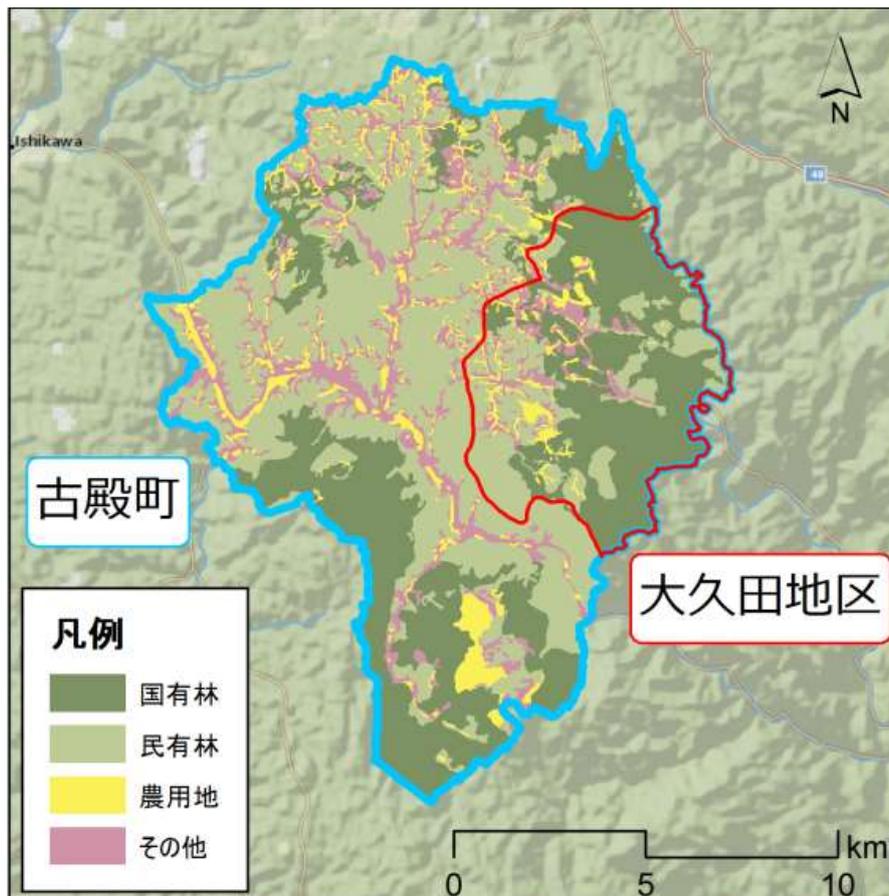


図 4 古殿町と大久田地区の土地利用現況

表 2 土地利用状況

	総面積	林地		農用地	その他	
		国有林	民有林			
大久田地区	41	37	24	13	2	2
	100%	88%	57%	31%	6%	6%
古殿町 (大久田含む)	163	133	60	73	13	18
	100%	82%	37%	45%	8%	11%

単位：km²

注：計測による面積のため、公称値とは一致しない

出典：国土交通省「国土数値情報」

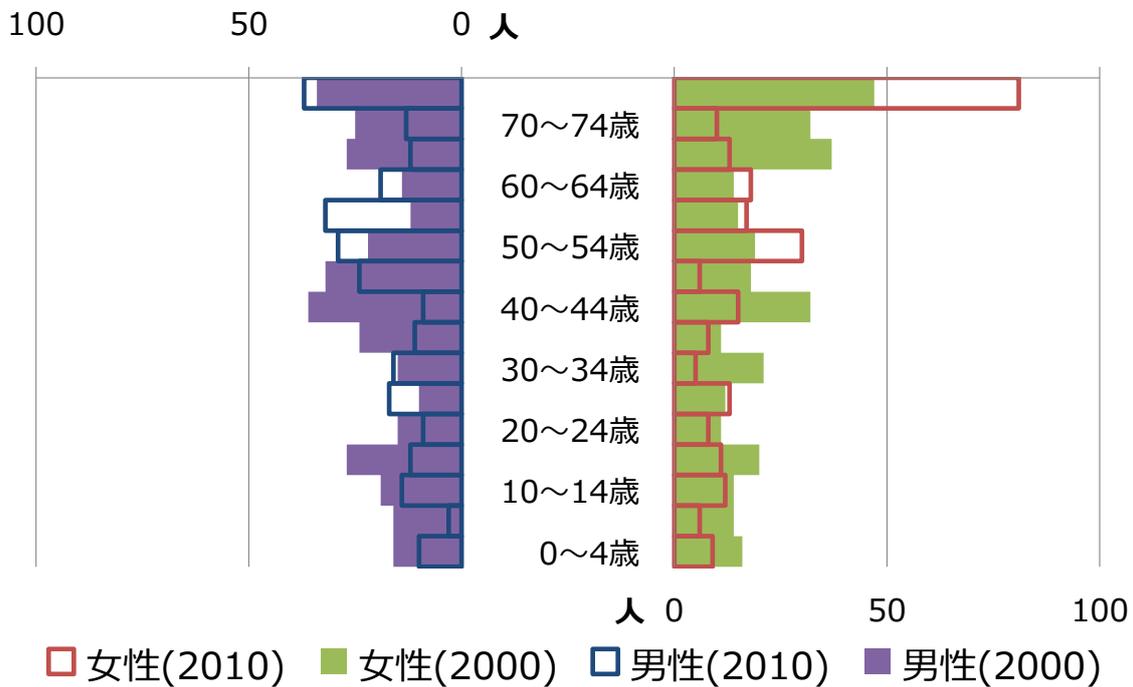


図 5 大久田地区の人口ピラミッド(2000年, 2010年)

出典：国勢調査 2010

3. 大久田地区の魅力と課題

3.1. インタビュー・アンケートを通じた地域の現状把握

3.1.1. 課題点の整理

大久田地区の現状を理解するため、インタビューとアンケートの結果を整理した。アンケートは大久田地区の全 145 世帯に配布し、有効回答 90 世帯を得た(回収率 61%)。ただし、アンケートにおいて不明回答が多く有効な分析結果が得られそうにない項目については結果を省略する。

地区の人口減少と関連して、世帯構成を把握する(図 6)。平均世帯規模は 3.5 人であった。他方、町外へ転出した平均世帯人員は 2 人である。転出者の 3 分の 1 は世帯主の兄弟姉妹、残る 3 分の 2 は世帯主の子供世代であった。地区外への人口流出の一方、地区外への転出者が世帯主の子供世代の場合、頻繁に大久田へと訪問している特徴がある。平均で年間 85 日、中央値で年間 11 日である⁵。特定の世帯で訪問頻度が極端に高く、平均値が押し上げられているが、それでも中央値ではほぼ月 1 回のペースで訪問していることが確認出来る。なお、転出先の地域との距離と訪問頻度に関連性はみられなかった。これらの特徴は、大久田地区の人口減少が将来さらに進んだとしても、地区外に暮らす世帯構成員の頻繁な訪問によって、地区が維持され存続する可能性を示唆している。

大久田地区の農業の特徴は、第 2 種兼業農家によって支えられていることである(表 3)。専業農家や第 1 種兼業農家では農地利用が大規模で、1ha 以上の水田を耕す農家の割合は 33%と高い。しかし、専業農家と第 1 種兼業農家数は 90 世帯のうち 9 世帯と少なく、地区の農地のうち 5%しか利用していない。他方、第 2 種兼業農家は回答の半数以上の 52 世帯が該当し、地区の農地の 56%を利

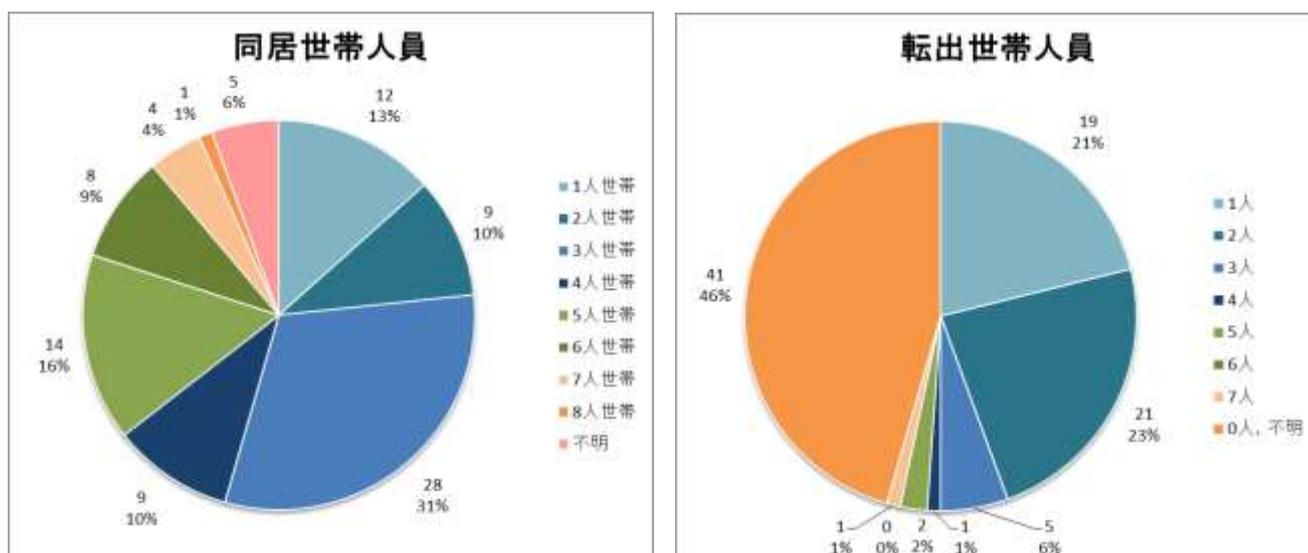


図 6 世帯構成の現状

出典：アンケート調査

⁵ 転出した世帯員に関する詳細な情報が得られなかった者については母数から除いている。彼らの訪問頻度を年間 0 回として考慮した場合、平均は年回 23 回となった。

表 3 大久田地区の農地の利用状況

農家の状況	稲作面積					畑作面積					耕作放棄面積				
	0a, 不明	10a未満	10a以上 50a未満	50a以上 1ha未満	1ha以上	0a, 不明	10a未満	10a以上 50a未満	50a以上		0a, 不明	10a未満	10a以上 50a未満	50a以上	
専業農家	3		1	1	1	3		3		3	2			1	
第1種兼業農家	6	1		1	2	6	2	2	2	6	3		2	1	
第2種兼業農家	52	16	2	10	14	52	10	13	24	5	52	31	3	15	
不明	29	15	3	7	2	29	16	5	8		29	19		4	
総計	90	32	5	19	19	90	28	20	37	5	90	55	3	21	

出典：アンケート調査

用している。耕作放棄地は地区全体の農地のうち 20%を占めるに到っている。その割合もまた第 2 種兼業農家で高く、40%を占める。加えて農家の状況が不明の世帯(おそらくその多くが農業から手を引いている世帯だと思われる)の耕作放棄地は地区全体の 45%を占める。農地を借りている世帯が 9 世帯に限られ、農作業の受委託は不明回答の多さから細かく議論は出来ないが、回答世帯主の平均年齢が 59 歳と農業の担い手の高齢化が進んでいることと地区内の農地が集約化しづらいことが考えられる。

古殿町にも道の駅が整備され、農産物の直売所を利用できる体制がある。道の駅以外にも民間経営の直売所が 2ヶ所県道沿いに立地している。しかし、大久田地区の農家は直売所を有効に活用出来ているとは言い難い。いずれの直売所も大久田地区外に位置し、出荷と回収の手間がかかることから、道の駅に出荷する大久田の農家は限られ、少なくなっている⁶。

農業の課題には獣害の問題も指摘された。イノシシおよびハクビシンによる被害が出ており、電気柵による対策が取られている。設置費用はおよそ 100 万円かかるが、その 7 割が補助でまかなえるため、広く対策が取られている。しかし、問題の元凶であるイノシシの駆除も困難な状況にある。町ではイノシシ捕獲に補助金を用意しているが、猟師も高齢化し担い手が不足しているため、被害は簡単には収まらない。

林地の所有状況は、回答世帯 90 世帯のうち、林地を所有しないもしくは不明回答の世帯は 30 世帯であった。残る 60 世帯では林地を所有しており、うち 51 世帯で所有面積が 1ha を超える。60 世帯の平均所有面積は 4.8ha である。林地のうち 79%にスギが植えられており、スギ生産に大きな特徴を見いだせる。しかし、林業の施業実績、内容に関する回答は不明回答が多く、林業の整備は地区全体を通してあまりなされていないとみられる。その最たる要因は木材価格の低迷にある。1990 年頃までは 1 立米あたり 3 万円を超える価格がついていたが、現在では 7000~1 万円程度まで下落しており、採算性が悪化している。なお、最近 5 年間で林作業を行ったと回答した 3 世帯では、切捨間伐も利用間伐も行われていた。また、特用林産物の販売実績は確認されなかった。

大久田地区内での林業の担い手は高齢化が進んでおり、60 歳以上の従事者に大きく偏っている。国有林が広がっているため作業量はあるものの、地区内の人材不足や一般競争入札の導入によって地区内だけで作業を受けきれず、会津を含め地区外の事業者の進出を許している状況にある。大久田でも何も手を打たなかった訳ではもちろんない。人材不足の問題を解消するために、林業の担い手を育てるため、長期間に渡る技術育成を支援する「緑の雇用担い手対策事業」も 2002 年から活用

⁶ 道の駅での聞き取りより。

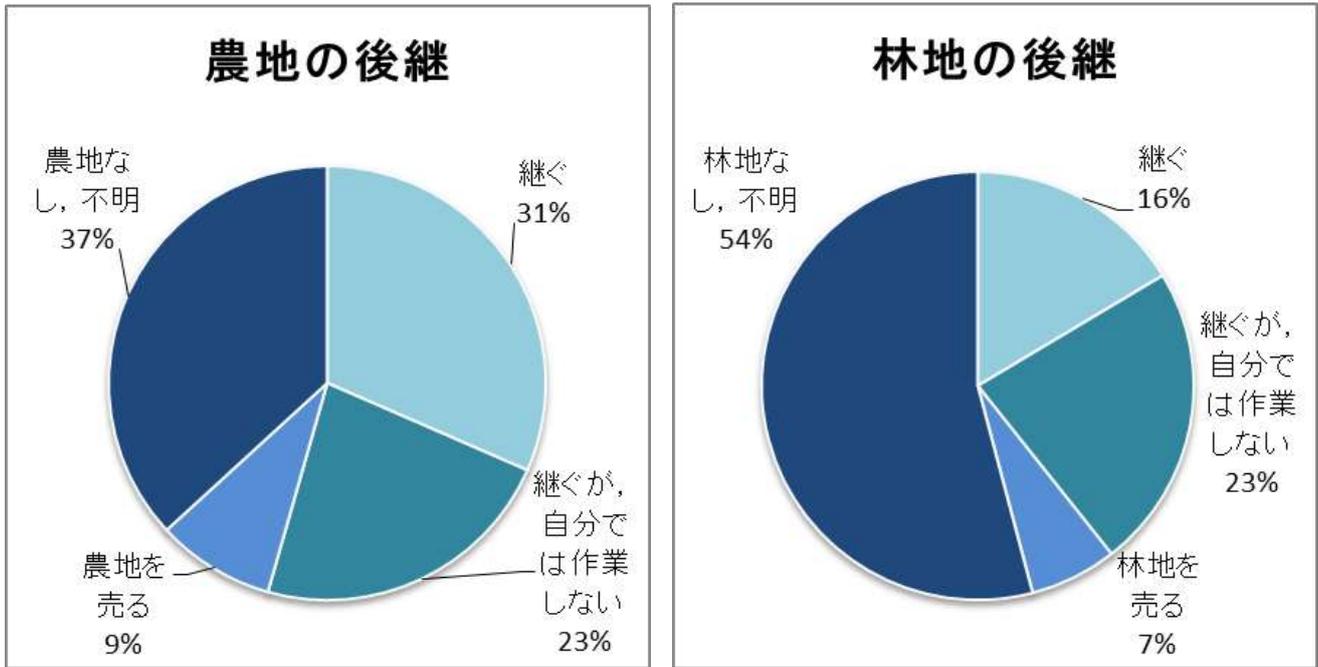


図 7 農林業の後継者の有無

出典：アンケート調査

してきた。

地域の基盤産業である農林業の後継者問題では、子ども世代が農地を自身で継ぐ世帯は全体の31%である(図 7)。また農地を継ぐが、自身で作業を行わずに委託する世帯が23%、農地を売る世帯が9%である。林地の場合、子ども世代が自身で継ぐ世帯は全体の16%、作業を委託しながら継ぐ世帯は23%、林地を売る世帯は7%である。農地よりも林地のほうが深刻な後継者問題を抱えている。

3.1.2. 魅力の整理

上記より、大久田地区の人材に関する課題を整理した。無論、地区内には問題のみ山積しているわけではなく、地区には魅力が数多く眠っている。以下にそれらの特徴を整理する。

大久田地区には豊かな自然の景観がある。広く知られる名勝として「越代の桜」がある。樹齢約400年の山桜は県指定文化財として認められ、林野庁の「森の巨人たち100選」にも選ばれている。越代の桜の整備にも地区の人は力を注いできた。国有地に含まれるため林地整備のため伐採も検討された経緯があるが、地区の重要な文化財として、町の教育委員会を説き伏せ、保存すべき文化財としての位置づけを得ることに成功した。越代の桜の周辺は、越代のサクラ公園として整備されており、毎年花見も行われている。有名な桜であることから、地区外からの観光客を数多く受け入れている。

自然景観として「大風川の溪谷」もある。トレッキングコースとして整備されており、落合の滝や鎮巖の滝、紅葉、かたくりの花など、四季を楽しめる見所がある。地区の到る所で見られるスギ林も立派な景観である。きれいに植林され、手入れの行き届いたスギ林は初めて訪れる者にとって、

自然と人間の融合を感じさせる素材である。さらに、「延命の清水」も自然の豊かさを表している。自然のわき水である「延命の清水」は越代延命の清水保存会によってきれいに整備されている。

大久田地区には人材の力がある。地区は区長を中心として地区内 13 班の班長、各世帯と地区内の統率体制が長く続いており、地区内をまとめ上げるリーダーシップがある。また、既に 10 年以上の活動実績を持つ「じねんじょ倶楽部」も地区内にある。構成員は 20 人程度で、彼らが 30 歳代の頃から活動を行っている。越代の桜の保全を行ったり、耕作放棄地の転作としてそばの作付けも行ったりしてきた。構成員は既に 40 歳代に達しているが、行動力のある組織である。さらに、まだ個人的な活動範囲に留まっているものの、区長宅では毎年冬にイルミネーションが行われている。つるし木の飾り付けも始め、地域の魅力づくりを精力的に行っている。余談だが、水野姓の多さも特徴のひとつである。アンケート回答の 53%が水野さんであり、名前にも地区の歴史が息づいている。

大久田地区は先に指摘した問題を憂う人材の活動によって、新たな取り組みも続けられている。例えば、秋に地区で行われている湯殿山の祭典に、花相撲大会を開催している。これは県の地域づくり総合支援事業のサポートを得て、ポスターを作成し PR に力が入っている。また 11 月には古殿町ロードレースイベントを大久田地区に呼び込むなど、活動に力が入っている。

3.2. マインドマップを用いた分析

3.2.1. マインドマップとは？

地域に眠る更なる魅力を探するため、マインドマップを作成することにした。マインドマップは、トニー・ブザンによって考案された思考ツールで、可視性の高さが特徴である。学習ノートやアイデアのメモとして用いられることが多い。基本アイデアを中心に、そこから放射状に連想する言葉を記述していく。その際、連想が連鎖することによって意識的な言葉だけでなく、超意識的な言葉(潜在的なイメージ)を引き出すことができる創造的な思考法である。さらに絵や色、字や線の強調によって脳が刺激され、イメージが膨らみやすい(ブザン・ブザン, 2009)。

3.2.2. 大久田のマインドマップ

我々は、「大久田地区」を起点としたマインドマップの作成を試みた。2 回目の訪問時、10 月 26 日に大学生 9 名がマインドマップを作成し、翌 27 日に集落の方 5 名にも作成してもらった⁷。大学生は当日初めて大久田地区を訪問した者も多く、まさに外部の視点からの意見と位置づけられる(図 8)。中には大久田が林業の地であることを象徴するかのようになり、まっすぐで幹の太いマインドツリーが描かれているものもあった(図 9)。

15 名が作成したマインドマップには、合計で 497 個のワードが記載されていた。497 のワードのうち、重複しないワードは 293 個に上るため、重複する 204 個のワードについてまとめる。まず、重複部分を丸めると 64 のキーワードにまとめられる(図 10)。このうち、最も多く現れたキーワードは 14 個の「越代の桜」であった⁸。次いで、「山菜」9 個、「杉」8 個、「食」「山」7 個、「延命の清水」「林業」6 個、「米」「祭り」「販売」5 個である。大部分の人が記載したキーワードは、目で楽しむことの出来る自然の要素であり、豊かな自然が地区の財産である。

⁷ 当日同席した県庁の職員の方にも作成してもらった。集計にも含めている。

⁸ 「桜」のワードも「越代の桜」と同義とみなした。

3.3. 郷土料理の再考

地域の魅力のひとつに『食』があるだろうと捉え、第2回訪問の10/26に郷土料理を作ってもらい、かつ我々も料理を観察、手伝う活動を行った。このきっかけは第1回の訪問時に「里芋の唐揚げ」を振る舞って頂いたことによる。それを食べた全員が「おいしい」と意見を述べていた。普段、目にしない、食べたことの無い『食』には人を魅了する力がある。それはなにも特別な料理でなくても良い。それぞれの地域には地域に伝わる郷土料理がある。そんなきっかけを元に実はもっといろんな食材や料理が眠っているのではないかと考え、郷土料理を作ってもらう機会を得た。

当日作られた料理は以下の通りである。



①



②



③



④



⑤



⑥



⑦



⑧

- ① 太子講団子
- ② 凍め餅のじゅうねんタレかけ
- ③ 里芋の唐揚げ
- ④ はやとうりの酢漬け
- ⑤ ゼンマイの白和え
- ⑥ じゃがいもの味噌炒め
- ⑦ 昆布の漬け物
- ⑧ 山菜と油揚げの炒め物

このように、地区には地元のユニークな食が存在している。農業や林業のように場所が固定化された産業だけが地域の基盤というわけではなく、これまで経済活動として光の当てられて来なかった食にも地域固有の文化としての重要な役割がある。特に、地域に暮らす人にとっては毎日、毎月、毎年定期的に食べる機会があり当たり前と化している郷土料理は、外の人間にとって全く食べることの出来ない貴重な存在である。食もまた地域の魅力として秘めたる力があると指摘できる。

今後その秘めたる力を活かすための課題として、料理の提供にせよ、レシピの公開にせよ、いかに外部への PR を行い、認知度を高めるかが重要な課題である。その上で商品化と現金化へ結びつけていく方法を考える必要がある。当日参加した学生の考えた案を次章で紹介する。

4. 活性化策の提言

4.1. 活性化の対策案

学生が考えたアイデアを列記する。その多くは、前章で紹介した大久田地区の郷土料理を活用して地域の活性化につながる活動のアイデアを提案している。

① 地域伝統料理の継承

若い世代に伝統料理を伝えなければ、地域の伝統料理が絶えてしまうという認識から、伝統料理の作り方を紙に残し、地区外の大久田出身者に知ってもらおう、というアイデアである。時々戻ってくる大久田出身者に家族内で伝える機会を増やすことができる。

② 夏祭り企画

みんなで大久田を楽しむことができる企画として夏祭りを提案したアイデアである。郷土料理や延命の清水など、大久田らしさを祭りに取り入れることで愛着のわく祭りを作ることが出来る。

③ 「食」の文化的側面を PR

11月に作られる太子講団子や冬の保存食である凍餅など、季節を感じさせる「食」の文化的側面に注目し、大久田地区内外の人に愛着を持ってもらおう、というアイデアである。お料理会を開催することで、母子の食文化継承のように地区外へと地元食文化の魅力を波及させることが出来る。

④ 食のさいはっけん

大久田には他に負けない野菜があり、それを郷土料理として調理できることが地区の魅力である。郷土料理の調理体験は都会では味わえない体験であるため、これを広げるというアイデアである。その際、既存の施設を利用することでコストを低く抑えるため、集会所を活用することを提案する。

⑤ 食の魅力発信

地区外へ魅力を発信する前に、地区内でもう一度料理に対する理解を深めることが肝心だと主張する。幅広い世代間で「みんなで作り、みんなで食べる」機会を持つためにも、人が多く集まる地区イベントで試食会を行う、というアイデアである。食の魅力発信とリピーターの呼び込みにつなげることが可能である。

⑥ 地域内活力の再生

農業体験やイベントを企画することで、若い世代を中心に、多くの年齢層との繋がりを深める、というアイデアである。地区外にいる人たちも巻き込めるイベントを企画することで大久田との結びつきを持つ人を増やし、地区の活力を高めることが出来る。

前章では、大久田地区の魅力と課題を食以外にも見つけているため、食以外の活性化案についてもまとめる。表4には直売所活用や郷土料理を含めて、活性化案をまとめた。それぞれアイデアのメリットとデメリットを整理し、それらを考慮して実現の可能性を3段階で評価した。

表 4 活性化案

方法	カテゴリー	可能性	メリット	デメリット
直売所へ農産物出荷	資源の活用	△	収入源	大量生産が難しい
郷土料理の提供	ツーリズム	◎	収入源, 女性の参画	場所と時間の確保
山菜採り体験の実施	ツーリズム	○	郷土料理と連携, 交流人口	放射能の問題
イノシシ狩りの受け入れ	ツーリズム	○	獣害対策, 交流人口	放射能の問題
林産物教育の展開	資源の活用	◎	地域貢献	収入と結びつかない
林業体験の実施	ツーリズム	○	林業を活用, 交流人口	担い手の確保
バイオマス発電の導入	資源の活用	△	林業を活用, エコシステム	初期費用が大きい

まず、直売所の活用に関しては農家の現金収入の拡大につながる効果が期待出来るが、大久田地区の地形環境から農業の大規模化は難しく、継続して商業作物を生産することは難しいと判断した。山菜採り体験の実施やイノシシ狩りの受け入れは、緑豊かな大久田の山林から得られる地域資源を、地域外からの訪問者と結びつけるアイデアである。山菜に関しては、地区外からの訪問者による不法採取に悩まされている声を伺った。これは裏を返せば、それだけのニーズがあることを表している。受け入れの体制がきちんと整備されれば、交流人口の拡大を期待できる。残念ながら、放射能の問題があり現時点での実現可能性は低い。これらのアイデアはすぐに実行に移せないが、それでもアイデア自体は暖めておいて損はない。

林業に関連するアイデアも考え続ける必要がある。収入増にすぐに結びつくような活動は容易ではないが、経済的価値以外の社会的価値を高める方向性もありうる。例えば、地域貢献として教育との接点を持つことである。林業の重要性を広く周知し、将来的に林業の担い手になる可能性を少しでも高めなければならない。またアグロツーリズムの1つとして農作業ではなく林業体験を用意することも交流人口を増やす対策となる。受け入れ体制を構築するのは容易ではないが、林業の重要性を体験できるレジャーは都会の人に受け入れられる余地があると思われる。さらに、バイオマスの活用は林業との相性がよい。発電設備やボイラー設備の初期費用が高いことや事業採算性が低いという問題から活動開始の敷居は高いが、間伐未利用材の活用や先進的なエコシステムの導入という社会的な評価は高い。

大久田地区の場合、先に地区の魅力で指摘したように、既に地区内で活動が活発に行われてきた。そのなかには、上に挙げた対策の提案と同じ観点の活動を既に行ったものがある。例えば、小学校と協力した教育への地域貢献として、小学校が統合される以前、大久田地区に小学校があった時には民有林を借りた学校林があった。児童が山林の管理を体験できる環境があり、地区の生活基盤を学習でき、世代間を超えた結びつきを強める活動であった。食に関しても同様に活動を行った経緯がある。古殿町としての活動となるが、既に地元の食材を活用した料理のレシピ集を作成した経験がある。2006年に町制施行50周年を記念して伝統料理の試食会を行い、「古殿町の未来へつなぐ食文化」と題した料理集を発行した。その際には、古殿町出身の野崎洋光氏が監修した⁹。このように

⁹ 野崎氏は1953年古殿町山上生まれ。1989年より「分とく山」の総料理長である。地産地消に関する

活動を続けている大久田地区だからこそ、活動を絶やさないためのアイデアの種をまき続けることが大事である。

4.2. 成功例の紹介

最後に、活性化の方向性に関連する成功事例をいくつか紹介する。既に成功した事例を知ることによって活性化のアイデアの種となり、行動のきっかけとなると考えた。我々の考えた活性化案とも関連させ、経済性、環境性、情報発信の3つの視点から紹介する。

4.2.1. 経済性

経済性の追求による成功事例は数多く存在する。その多くの事例で、販路の多チャンネル化もしくは高付加価値化に成功している。販路の多チャンネル化は、1990年代以降全国に広がった農産物直売所や加工所、農村レストランの展開に寄る所が大きい。

高付加価値化も重要な解決策の1つである。例えば、食材の加工は郷土料理を軸として取り扱うことが可能であり、林業もまたブランド化の可能性が秘められている。地域の食に対する期待は大きく、2012年度には農林水産省で「地域食文化活用マニュアル検討会」がスタートするなど、国レベルで注目されつつある。この検討会は食文化を活用した地域づくりを体系的に行うための実務マニュアル作成を目的としている。既に活性化に成功している集落の事例も紹介されており、大久田地区と似た特徴を持つ集落の例に、宮崎県西米良村小川地区がある¹⁰。西米良村は96%を山林が占める林業の村であり、中でも小川地区は人口100人弱の高齢化問題を抱える集落である。小川地区では、「おがわ四季御膳」を筆頭に地元食材による郷土料理の提供している。さらに、特産加工品の製造販売、花見山づくり、宿泊・研修施設の運営、山菜まつり等の住民主導の地域づくりが行われている。現在、年間2万人以上を受け入れ、売上げも2000万円を超える取り組みとなっている。小川地区の成功のポイントは、①2年間で約100回に上る会合の開催など住民主導の活動、②地域の家庭料理を用いた「おがわ四季御膳」のヒット、③活動に対する不安の解消は住民の覚悟と村役場への信頼関係で克服、④活動の拠点となる施設を設置、にまとめられる。

また身近の事例として、会津若松市も食を題材にした地域づくりを2012年度に始めている。「振会津伝統美食研究会」を開催し、野崎洋光氏ほか5人の料理人が考案したレシピを公開し、会津の郷土料理に関する情報発信を行っている。大久田地区、古殿町においても既に食の魅力をレシピにまとめた実績があり、食の魅力の可能性は大きいので、対抗意識も活用しながら地域活性化に繋がる活動へ発展させる必要がある。

林業について言えば、古殿町の林業は既に良質のスギ材生産地としてのブランド化に成功しているが、その価値を更に高めるために、森林認証制度を活用する方法が挙げられる。現在最も有名な森林認証制度として、適切な森林管理、製品の生産流通を保障するFSC認証がある¹¹。2009年時点

講演を多数行っている。

¹⁰ 農林水産省『地域食文化活用マニュアル検討会、第2回(2012年11月1日開催)配付資料1』(http://www.maff.go.jp/j/study/syoku_vision/manual/pdf/chosa.pdf)より(2013年3月15日最終アクセス)。

¹¹ 1993年設立の森林管理協議会(Forest Stewardship Council, FSC)という国際非政府組織が運営している。熱帯林の破壊に対するヨーロッパでの環境保護活動が背景となっており、自然林の保全を前提と

で1億1400万haを超える森が認証を受けているが、日本では27件28万haのみ認証されており、高いハードルが設定されている¹²。その反面、環境性と品質の高さが保障され、消費者に対する信頼性や説得力が向上し付加価値が高まっている。宮崎県諸塚村は村ぐるみでFSCの森林認証を受け、産直住宅事業を展開している。産直住宅用材は品質維持のため、供給量の10%に絞っているが、それによりイメージリーダー効果が生まれている¹³。最上位製品のイメージが消費者の記憶に残り、他の下位の製品のブランド認知にも良い影響を与え、一般材の取引価格の向上に結びついている。

4.2.2. 環境の重要性

地域は、人が自然と融合しながら生活を行う場であるため、農林業は地域と密接に関連している。特に林業は環境に最重要である森林を活用している。森林には経済的に評価されにくい見えない価値が眠っているため、社会的な側面や環境的な側面を適切に評価する必要がある。2011年の福島原発事故を受けて日本でも環境に関する考え方は着実に変化が起きているが、電力需給にはなお経済性が重要視される傾向にあるため、森林に対して社会的に適切な評価が与えられるにはまだまだ時間を要すると思われる。それでもアイデアの種を集めておけば将来芽が出るかもしれない。

環境にやさしいエネルギー活用には、地熱や太陽光、風力なども挙げられるが、緑豊かな大久田地区ではバイオマスの可能性が眠っている。ただし、現時点でバイオマスを活用して発電するエネルギー活用は採算性に問題がある。大規模蒸気発電を行う場合においても、10,000KWの電力生産の採算ラインは、~2円/生kgであり、間伐材や未利用材を活用したとしても到底黒字を達成することはできない。現時点で最も経済性がある手法はチップボイラーによる熱利用である。この場合、採算ラインは~6円/生kgで、活用の可能性がある。チップボイラーによる熱利用、実は既に古殿町でも取り入れられている。2009年度よりペレット・薪ストーブの設置補助事業を開始しており、これまでに役場や保育所などに設置されている。大久田地区でもペレットストーブを導入し、先進的な環境対策を行っている地域であることをアピールできるチャンスがある。

また、隣の鮫川村は「薪の村」構想を打ち出し地産地焼の活動の芽が出始めている(季刊地域編集部, 2013)。チップボイラーから薪ボイラーへと事業を拡大しており、新エネルギーの村へと舵を切っている。薪用原木は広葉樹8円/kg、針葉樹5円/kgという買い取り価格の経済性の問題と、利用後の灰に残る放射性物質の処理の問題があるが、林業と環境の融合事例である。

4.2.3. 情報発信の多様化

情報発信を活用した地域活性化の成功事例に、徳島県上勝町の「いろどり」ビジネスがある(古川・園部, 2011)。高齢者が人口の49.5%と限界集落の一步手前の山村だが、葉っぱを活用した「つまもの」の市場開拓に成功した。年商2億6000万円(2009年)、全国シェア80%(2008年)を誇っている。市場が料亭や旅館などに限られているため、市場の需要と供給のミスマッチを防ぐべくパソコンと

している(井上ほか2004, P89)。そのため、人工林の多い日本の林業には適さない側面もある。

¹² FSC ジャパン『FSCは森をまもるチェック』

(<http://www.forsta.or.jp/fsc/images/files/moriwomamoru.pdf>)より(2013年3月15日最終アクセス)。

¹³ 経済産業省四国経済産業局『四国発！高付加価値型森林ビジネスの手引き』

(http://www.shikoku.meti.go.jp/soshiki/skh_b5/5_houkoku/110325/110325c.pdf)より(2013年3月15日最終アクセス)。

無線 Fax を利用して POS(販売時点情報管理)システムを導入している。また意識的にマスメディアに露出し、注目を集めている。その結果、U ターン者、I ターン者が増えつつある。また、JICA の研修員を中心に海外からの視察を受け入れ、交流人口が増加している。2009 年には視察者だけで約 4600 人に上った。上勝町の成功のポイントは、①横石氏という活動のリーダーの存在、②葉っぱを商品化する逆転の発想、③地域資源の有効活用(女性の働く場と標高差を利用した多品種栽培)、④情報の有効活用、にまとめられる。

加えて近年、地域活性化に対するソーシャルメディアの活用事例の報告がいくつか出てきた。地域活性化は地域内の活力を再び取り戻すと同時に、地域外からの交流人口の拡大とそれに伴う経済活性化が重要である。若い世代や都会人は情報化社会に対する適応度が高く、ソーシャルメディアに対する理解も深いため、多様な世代に地域活性化の情報発信を行うためにも情報発信の仕方そのものにも多様化が求められていると言える。すでに黒田・宝田(2012)や定平ほか(2012)によって、鳥取県米子市や富山県舟橋村、埼玉県における情報発信の変化が報告されている。地域の魅力に対する情報発信力を強化することで、地域外の認知度を高め地域活性化の一助となる可能性が示唆されている。この点は、他の地方自治体も手を出し情報が過度に蔓延する環境において、情報発信の差別化を意識しなければならない。

以上より、活性化に成功している地域は自分たちの地域資源の魅力をしっかりと把握し、うまく活用している。リーダーの存在や地域全体の覚悟といった点も重要なため、住民間の意思疎通が大切である。

5. おわりに

以上、大久田地区の魅力と課題、その解決策を探ってきた。大久田地区は、他の問題を抱える地区に比べるとまだ恵まれていると言える。地区内には豊かな自然がある。地区の問題を憂う人材がいる。世代を跨いで活性化を担う活動主体がいる。多様な活動を行い、新しいアイデアが出ている。そのような中、問題と言えるものは、将来のために今何をすべきか、ということであろう。先に指摘したように大久田地区の人口減少は激しいため、今後 10 年、20 年経った時には深刻な問題を抱えかねない。だが、今はまだ力を有している地区である。大久田地区の人たちの目は輝いており、しっかりと前を向いている。だからこそ、地区に力が残る今のうちに手を打ち、活性化への対策を行っていくことが肝心である。

そのためにも、使える地域資源を探り、それを最大限活用することが必要である。人材も、自然も、文化も大久田地区が誇る地域資源である。例えば人材について言えば、女性には秘めたる力がある。地域の食文化の継承者である彼女たちの力を活用できれば、郷土料理を商品化、現金化する道が開ける可能性は高い。加えて、人材は地区内の人間に限ることはない。我々もまだまだ活用の余地がある資源である。先に述べたソーシャルメディアを通じた情報発信などは、若いデジタル世代を活用すれば良い。

自然豊かな大久田地区を田舎という負なイメージに留めてしまうにはあまりにもったいない。都会にない自然や文化、人の繋がりは立派な財産である。前章の提言の何か 1 つでも地区の方にとってこれは試してみる価値あるかもと思ってもらえるものがあれば幸いである。地域活性化を成功させた人の言葉を借りて報告書を終わりにしたい。

『可能性の無視は最大の悪策。1%の可能性があるならやってみる(高野, 2012).』

参考文献

- 井上 真・酒井秀夫・下村彰男・白石則彦・鈴木雅一 2004. 人と森の環境学. 東京大学出版会.
- 黒田 卓・宝田大樹 2012. 地域コミュニティ活性化へのソーシャル・メディアへの期待と現実. 地域生活学研究. 3: 99-104.
- 定平 誠・齋藤 忍・松浦克樹 2012. ソーシャルメディアによる地域コンテンツのイメージ戦略とブランド化—埼玉のブランディング力向上をめざした地域活性化計画. 尚美学園大学芸術情報研究. 21: 1-16.
- 高野誠鮮 2012. ローマ法王に米を食べさせた男. 講談社.
- ブザン, T・ブザン, B. 神田昌典 訳 2005. ザ・マインドマップ—脳の力を強化する思考技術. ダイアモンド社.
- 古川一郎・園部靖史 2011. いろいろ一過疎地発の葉っぱビジネス. 古川一郎 編. 地域活性化のマーケティング, 有斐閣, 67-97.
- 結城登美雄 2009. 地元学からの出発—この土地を生きた人びとの声に耳を傾ける. 農山漁村文化協会.

謝辞

今年度、報告書の作成に到るまでの間多くの方々の協力を頂きました。大久田地区区長の水野様ならびに地区の皆様、古殿町役場および福島県地域振興課の職員の皆様には、様々な面でお世話になりました。この場を借りてお礼申し上げます。



10/26 撮影